



## 関西大学の教育改革と新しい学年暦

副学長(教育推進部長)・政策創造学部教授 小西 秀樹

学年暦（専門職大学院を除く）の新しい編成方針が2026年度から施行されます。全キャンパスで学年暦を統一し、1学期1,350分（1限90分を各学期15回）の授業時間を確保することは現行どおりです。そのうえで「14週の授業期間とオンデマンド配信授業1回（90分相当）」の組み合わせを原則とします。「オンデマンド配信授業1回」については、学部・研究科等の機関決定により、一部の科目において特例としての対面授業実施が可能となります。主として演習、実験、実習系の科目等、対面授業で効果が生じる科目が想定されますが、学部・研究科等がその教育方針に照らして決定します。

本学ではこの十数年、コロナ禍の教育経験もふまえ、全学、各学部で教育充実に向けた多様な改革が推進されてきました。新学部、新学科の設置のほか、BYOD推進、多様なメディアを活用した授業の制度的運用、学生の学修成果可視化へのIR活動、それらを活かしたカリキュラム改革、授業の改善工夫などです。学生の留学、正課外の活動も再び軌道に乗り、また24年度より開始の多文化共修（大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援）事業も含め、本学の教育内容、環境の多様化が一段と進むことが想定されています。総じて今回の学年暦新方針の策定は、多様な教育展開によって「学生の主体的な学び」を深めていく、そのための枠組みづくりのひとつとして位置づけています。さらに、教育職員、事務職員のみならず学生も含めたワーク・ライフ・バランスにも配慮しました。新方針により、曜日振替授業の抑制が見込め、祝祭日の授業日利用という課題も一定改善できる見通しとなりました。

タイトルに「関西大学の教育改革」と掲げましたが、学年暦方針の改定そのものは確かに「改革」であるにしても、それで終わりでは決してありません。学年暦に関していえば、本学では、約20年前のセメスター制の全学導入以来の大きな動きです。しかし大切なことは、学年暦によっ

てどのような教育を展開していくのか、議論と行動、見直しを重ねることです。しかも「改革」とは変えることだけでなく、同時に、変えてはならないものを見定めること、直截にいえば「改革」で失ったものもあるのではないかと自省することも欠かせません。「改革」では、課題への対応も措置しておく必要があります。教育では特にそうです。「改革」を適時に行なながら、つねに学生の意識、学びの現実をふまえ、「適切」に教える側の責任を果たしていく。何が「適切」なのか、その基準についても、全学、各学部・研究科で確認し、適時の検証が必要になります。教育の質保証です。質保証推進については、今日、全学、学部・研究科単位で、さらには個々の授業で、各事務部署においても、いっそうの説明責任が求められています。

そうした環境変化のなかでの新学年暦です。1回のオンデマンド配信回を組み込むことで、それが他の14回の対面授業とどのように関わり、科目全体、どのように効果を発揮していくのか、ご担当の先生方には様々な工夫をお願いします。全学各キャンパスにおける教育環境の整備、オンデマンド教材の作成支援、活用事例の紹介、全学研修の実施など、重い責任が教育推進部に課されます。それにしても、今回の決定にあたり、全学会議での多角的なご指摘、ご提案はもちろん、各学部・研究科とのお話し合いにおいて、それぞれ明確な理念のもと、特色ある教育に取り組まれていることに改めて気づかされました。事務部署からは制度や運用をふまえた貴重な観点を提示いただきました。本学の教壇に立って30年になりますが、ひとりの教員としても勉強になりました。道すがら様々な先生から賛否両論、忌憚のないご意見も頂戴しました。この自由闊達な雰囲気によってこそ本学の教育はさらなる充実に向かって動いていくのだと、そう確信した次第です。

### 新学年暦に向けたFDセミナーのご案内

教育開発支援センターでは、2026年4月からの新学年暦に向けたFDセミナーを開催しております。なお実施済みの回（第4・5回除く）の動画・資料は、右記Webサイトで学内限定公開しています。

※参加申込、詳細、動画・資料配信（順次更新中）  
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/remotelecture/>



	日 時	タ イ プ	タ イ プ
第1回	実施済み	教育改革に向けた挑戦 ー新たな学年暦への変更についてー	
第2回	実施済み	シラバスの記載方法とオンデマンド配信授業の事例	
第3回	実施済み	動画作成の操作方法の解説	
第4回	実施済み		対 面 シラバスの書き方ワークショップ
第5回	2026/1/14(水) 16:20 ~ 17:50		オンライン 著作権の取り扱いについて
第6回	2026/3/5(木) 14:30 ~ 16:00		オンライン 非常勤講師対象授業支援説明会 ーLMSの簡易操作と授業支援に関する説明ー
第7回	2026/3/24(火) 15:00 ~ 16:00		
第8回	2026/3/27(金) 10:30 ~ 11:30		

# 新学年暦におけるオンデマンド配信授業がはじまります！

教育推進部教授 岩崎 千晶

関西大学では、2026年度より各科目の15回の対面授業のうち1回を、オンデマンド配信授業として実施することになりました。

オンデマンド配信授業は、平成13年文部科学省告示第51号（メディア授業告示）に基づくもので、多様なメディアを高度に利用して文字、音声、静止画、動画等の多様な情報を一体的に扱い、いくつかの要件を果たすことで面接授業に相当する教育効果を有すると認められる授業形態です。

オンデマンド配信授業の強みは、学生が自分のペースで繰り返し学習できる点にあります。基礎理論や概念の説明など知識習得が中心となる回、反復練習が必要な技術指導、あるいは中間時の振り返りと復習など、学生が時間をかけてじっくり取り組むべき内容に特に適しています。

オンデマンド配信授業には、授業時間90分の確保が必要です。動画視聴時間と学習課題への取り組み時間を合わせて90分相当としてください。また音声とスライド資料を組み合わせた動画形式で提供する必要があります。これは、メディア授業告示にある、多様なメディアを高度に利用して多様な情報を一体的に扱うという要件を満たすためのものです。

学習課題については、意見交換、小テスト、ショートレポートなど、授業目標に適した多様な形態から選択できます。また、学習課題に対しては丁寧なフィードバックを実施し、関大LMS等を活用して質疑応答の機会を確保してください。メディア授業告示では、授業に関する学生の意見交換の機会、授業を行う教員が授業の終了後すみやかにインターネットその他の適切な方法を利用して、設問解答、添削指導、質疑応答等による

十分な指導を行うことが求められています。

成績評価は対面授業と同様に実施しますが、初回をオンデマンドとする場合は履修変更などにより、初回授業までに受講環境が整っていない学生がいることも考えられますので、配慮が必要です。また配信期間を明示し、学習方法や連絡方法をシラバスと関大LMSで提示してください。適切な配信期間の設定、文字の可読性への配慮、特殊なソフトウェアを要求しないこと、学生の通信料負担を考慮した容量圧縮などにもご留意ください。質問等ございましたら教育開発支援センターまでお気軽にお寄せください。

**オンデマンド配信授業について**  
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/remotelecture/>



## オンデマンド配信授業 —シラバスの記載方法について—

教育推進部准教授 山田 嘉徳

新学年暦の導入に伴い、オンデマンド配信授業を実施いただくにあたってシラバス記載方法が変更されました。以下に要点をお示しいたします。

まず、シラバスへの記載が必須となった項目として、オンデマンド配信授業の情報を学生に分かりやすく周知するため、「授業計画」欄と「備考」欄の両方に、それぞれ必要な情報を記載いただく必要があります。

「授業計画」欄には、オンデマンド配信授業回として、授業テーマに加えて学習時間の内訳を明記いただきます。ここでいう学習時間とは、授業動画の視聴時間と学習課題に取り組む時間のことです。例えば、「授業動画30分×2本、学習課題30分」といった形で記載します。授業動画そのものが90分である必要はありません。学習課題を含めて合計90分相当となるよう設計していただければ問題ありません。なお、予習・復習の時間は含みませんので、ご注意ください。学習課題としては、小テスト、掲示板機能を活用した学生同士の意見交換、ショートレポート等が想定されます。

「備考」欄には、オンデマンド配信授業回に関する三つの情報を記載いただきます。一つ目は配信元です。関大LMS等、具体的な配信プラット

フォームを明示します。二つ目は配信時期です。具体的な配信開始日時と終了日時を記載いただきます。三つ目は質問等の対応方法です。対面授業時での対応、関大LMSのメッセージ機能、メール等、学生が質問できる手段を示してください。

オンデマンド配信授業の実施にあたっては、学習課題に対するフィードバックを実施し、双方向性を確保することが求められます。成績評価については、対面授業と同様に行いますが、初回をオンデマンド配信授業とする場合は、履修環境が整っていない学生への配慮が必要となります。

記載例等につきましては、教育開発支援センターが発行するシラバスガイドをご確認ください。また、シラバスの記載方法に関するFDセミナーも開催しております。ふるってご参加ください。

**シラバスガイド・FDセミナーについて**  
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/remotelecture/>



# 学生から見た学びのリアル 学生の「楽単志向」の謎に迫る

教育推進部教授 山田 剛史

大学生の「楽単志向」（単位を楽に取れる授業を選ぶ傾向）の増加は全国の大学教育が抱える大きな問題の1つです（図は、ベネッセ教育総合研究所『大学生の学習・生活実態調査』より）。探索的な研究を通じて、この現象の背景には、様々な要因が絡み合っていて、一概に学生の問題だけに帰せないこと、そこには日本の学校教育の構造的な問題が含まれていることが見えてきます。解決は容易ではありませんが、社会が大きく変わる中、教育を通じて主体的・自律的に学ぶ学生を育成することは極めて重要な大学の責務だと考えます。本稿では、学生がなぜ楽単志向に依拠しているのか、その背景に何があるのかを明らかにするべく、学生から得られた記述内容等を紹介したいと思います。

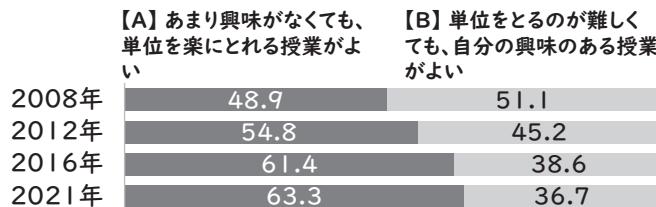


図 単位取得（履修）に関する選好

筆者の授業を受講していた社会科学系の学部3・4年生が、授業後の振り返りで「楽単志向」について書いてくれた記述内容を分類すると、「学生側の要因」「教員側の要因」「制度面の要因」「環境面の要因」の4つのカテゴリーが抽出されました。「学生側の要因」として、目的意識や学業意欲を欠いた学生だけでなく、真面目な学生が様々な理由を背景として結果的に楽単志向に流れているケースも存在しています。特に、「大学教育側の要因」が極めて大きいことが示唆されます。授業内容、教育方法、評価方法、シラバスなど、授業の質やFDに係る様々な問題が挙げられているとともに、教員の学生に向き合う態度や言動が与える影響も小さくありません。質保証や制度化が進めど、GPAなど指標が画一的であれば学生の主体的な学びを阻害する恐れもあります。各種制度や仕組みが学修者に及ぼす影響についても慎重に検討することが求められます。

学生が何を感じ、何を考え授業・学習に臨んでいるのか。ここに焦点をあて、解像度を上げることで、目の前の学生にとってより最適な教育・学習環境を提供することが出来ると考えています。

## 連載＜第3回＞高等教育研究が拓く学びの風景 世界の先進的なシラバスから「学習者中心の授業設計」を構想する

教育推進部准教授 山田 嘉徳

シラバスには多様な形態が存在します。2007年の大学設置基準改正以降、本邦のシラバスは概ね詳細化・均一化が進行しています。

世界のシラバスの動向を眺めてみると、アメリカのシラバスは教員の自律性の高さから形式、内容ともに多様な点が特徴で、近年では契約型シラバスから参加型シラバスへの移行がみられます。参加型シラバスではデザイン性を重視し、当該科目的受講生の声を掲載するなど、ニュースレター形式で構成されるケースも多くみられ、その効用が実証的に検討されています（Ludy et al., 2016）。

ヨーロッパのシラバスは、ボローニャ・プロセスの影響下で欧州単位互換制度に基づく形で汎用的な学習成果を重視しています。「学生が何を達成するか」を明示した上で、コンピテンシー（能力）重視のアプローチを採用しています。また各国においても違いがみられ、ドイツは学問の自由を重視する傾向が強い背景から比較的内容は簡潔で、イギリスにおいては質保証機関の影響で中身は詳細ですが、いずれも教員の裁量は本邦より大きいことが特徴として挙げられます。

シラバスの今日的動向に関する調査結果を踏まえると、(1)質保証の要請を満たしつつも一定の多様性を許容すること、

(2)教える内容から学習成果への転換を図ること、(3)視覚的魅力の追求を通して学生のエンゲージメントを高める工夫を施すこと、(4)システム上の柔軟性を確保することなど、「学習者中心の授業設計」のあり方を考える上で示唆が得られます。そして質保証のための画一的な取組がかえって主体的な学びを阻害することが、学生の学習への志向性にまつわる一連の調査からも示唆されています（学生から見た学びのリアル「学生の『楽単志向』の謎に迫る」を参照）。シラバスも同様に、管理のための詳細化にのみ議論を留めず、学生の学びを支援する一つのツールとして位置づけ、学生の学びと成長を中心に据えた見方をもって学習支援環境を検討することが不可欠だと考えられます。

- 教育理念や学習成果のわかりやすい提示  
当該科目が学生の将来にどう役立つかを具体的に示しているか
- 可読性を向上させる見出し等の使用  
情報の階層を明確にし、必要な情報へのアクセスが容易なものになっているか
- 契約的要素の要点の簡潔な記載  
長大な規則よりも、重要な点が明確に、読みやすく提示されているか
- 図表・色・写真による情報の分節化  
視覚的要素を活用し、長文テキストを分割して理解しやすい工夫を施しているか
- 学生目線の親しみやすい表現の使用  
固い学術的表現を多用せず、可能な限り対話的で親しみやすい表現が選ばれているか
- 詳細情報の集約  
本体を簡潔に保ち、詳細は必要に応じて参照できるように工夫を施しているか

### 図「参加型シラバス」を設計するポイントー「契約文書」から「学びへの招待状」へー

（注）Ludy, et al. (2016) の知見を編集して作成

# Active Learning再考の必要

教育推進部教授 三浦 真琴

中央教育審議会答申（2018）は「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と課題発見型学習の意義を明確に述べている。ところが用語集では能動的学修を「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義する。幸福を「幸福と感じること」と定義する如くの愚である。能動的学修は学びの様態であって、教授法でも学習法でもない。かくて加えて2015年には能動的学修を「学生にある物事を行わせ、行っていることについて考えさせること」と使役態を用いた不適切な表現を採択している。「学習指導要領等の改善」答申（2016）では特定の学習や指導の「型」に拘泥する事態への危惧が示されたが、これは能動的学修を方法と定義したことによる結果である。学習指導要領改訂案（2017）では「アクティブ・ラーニング」の文言が消えたが、それは定義が曖昧な外来語で抽象的であるからと説明している。しかしこれはアメリカの高等教育界で起き

た大きな変化 “From teaching to learning” を看過したものである。教師が教えると学生は「教えられる being taught」だけになり、自ら学ぼうとしなくなるので、そこより脱却すべきという指摘である。“Being taught” すなわち “passive learning” に対置する言葉として “active learning” が用いられたのである。語義にしたがえばこれは学習者の態度を示す言葉であり、学生はこれを「過去・現在・未来をつなぐ知識を構築し、意味を探求する営み」として、教師は「学生を能動的・主体的な学習者へと育てる営み」として捉えなければならない。OECD（2019）の Learning Compassでは全ての学習者は自らの関心に応じて目標を設定して自律的な学びを進め、責任を持って Well-being（社会でよりよく生きること）を実行すべきとされた。2033年度には新しい学習指導要領の下で主体的で対話的で深い学びを9年に渡って積み重ねた者が大学に入学してくる。大学はアクティブ・ラーニングの意味を正しく理解し、彼ら彼女たちに Well-being に向けた更なる学びの機会を提供しなければならない。

## CTL掲示板

### 2025年度春学期のライティングラボ個別相談の利用状況

2025年度春学期におけるライティングラボの個別相談利用件数は646件となり、前年度の同じ時期に比べて減少しました。利用者アンケートでは、「ライティングラボに来室した目的は達成されましたか?」という設問に対し、408件の回答が得られました。100%の学生が「達成できた」「まあまあ達成できた」という回答を選択しており、利用者の多くがラボの利用に満足しているといえます。

個別相談では、大学院生などのチューターが、対話を通じて学生の文章作成を支援しています。相談対象となるのは卒業論文やレポート、スライドやレジュメなどの発表資料、志望理由書などの学生生活に関わる幅広い文章です。

個別相談を中心に、先生方の授業との連携も行っています。学生に課したレポート等の内容を事前に共有していただくことで、先生方のご要望をふまえた支援が可能になります。所属学部によらず、千里山、高槻、高槻ミューズ、堺の各キャンパス、Zoomでのオンライン相談のいずれもご利用可能です。授業連携のご依頼は、右記QRコードからお願いします。なお、相談対応を行うチューターが情報を

ライティングラボ アカデミック・アドバイザー 坂元 悠子

十分把握するために、ご依頼の期限を受講生がラボの利用を開始する1週間前までとさせていただいております。

ライティングに関するイベントも開催しています。2025年度は昼休みの30分間でレポート執筆のための基本的なスキルを学ぶワンポイント講座や、レポートや論文の執筆の場を提供する「Writing With Us」を実施します。ワンポイント講座の録画資料は関大LMSの「ライティング力を高めていいレポート・卒論を書こう！」内で公開しています。当コースのe-Learning教材と併せてご活用ください。

利用案内  
(教員向け)

## 活動報告

2025年10月30日（木）、第31回FDフォーラム「予測困難な時代における学生の学習行動をいかに読み解くか」を、早稲田大学の濱中淳子先生をお招きし、開催いたしました。当日の報告はCTLwebサイトからご覧ください。

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/topics/31fd1030.html>



KANSAI  
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター CTL Newsletter

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 MAIL: [ctl-staff@ml.kandai.jp](mailto:ctl-staff@ml.kandai.jp)  
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/>

発行日／2025年12月19日 編集・発行／関西大学 教育開発支援センター